長崎でかたる

～自分のことばで～

昭和20年8月9日、長崎のまちは一発の原子爆弾により壊滅状態となり、多くの人々の尊い命が奪われました。「70年は草木も生えない」といわれた原爆の惨禍から、先人たちの不屈の努力でまちは復興しました。

しかし、核兵器のない平和な世界を実現しようと自らの声で語る被爆者は年々少なくなってきています。

平和について「自分に何ができるか」、一人ひとりが考える夏がやってきます。

平和公園の様子（平成27年8月9日）

1．被爆地長崎の取り組み

継承と発信

「継承と発信」。これは、核兵器のない平和な世界の実現のために、被爆地長崎が行う取り組みのテーマです。主な取り組みを紹介するとともに、自分のことばで被爆の実相を次世代に伝えようとする活動も紹介します。

1 被爆の実相を伝える
被爆者による体験講話 など

2 世界のズレを正す
核実験への抗議 など

3 世界に次の一歩を示す
核兵器禁止条約締結の訴え など

4 ネットワークを広げる
平和首長会議、日本非核宣言自治体協議会 など

5 ゴールを示し続ける
平和宣言の発信 など

6 平和を担う人材を育成する
国際会議への若者の派遣 など

長崎原爆資料館展示リニューアル

開館から20年を迎えるにあたり、被爆70周年事業として最新の映像・情報機器などの導入により観覧環境を改善したほか、米国国立公文書館で収集した写真・動画資料や被爆者の絵画などを公開し、展示内容の充実を図りました。

核兵器廃絶長崎連絡協議会（PCU-NC）

長崎を最後の被爆地にと願い、県、市、長崎大学が連携し、構成する核兵器廃絶のための協議体（長崎平和推進協会および長崎原爆死没者追悼平和祈念館も参画）です。専門家による市民向けの講演会や情報発信などを行っています。

また、平和を担う人材を育成するため、昨年は、NPT再検討会議（ニューヨーク）に「ナガサキ・ユース代表団」を派遣し、会議の傍聴や世界の若者とのワークショップを開催しました。

長崎平和特派員

国外で平和活動を行っている人材を「長崎平和特派員」に認定して、その活動を支援し、ネットワークを構築しながら、国外における平和の取り組みを推進しています。

ヒロシマ・ナガサキ原爆展

広島市と共同で、海外の主要都市において原爆展を開催することで、広く被爆の実相を伝えています。

原爆展では、写真パネルや被爆資料の展示、ビデオ上映のほか被爆体験証言などを行っています。

青少年ピースボランティア

15～30歳未満の青少年が被爆の実相や戦争について学び、さまざまな視点から考え行動することにより、被爆体験の継承と平和意識の高揚を図っています。

青少年ピースフォーラム

毎年、平和祈念式典にあわせて全国の自治体が派遣する平和使節団の青少年と、長崎市の青少年とが、フィールドワークや意見交換を通して、平和の尊さを学びます。

平和学習発表会

市内の中学生が一堂に会し、日頃取り組んでいる平和学習の成果などの発表をとおして、各校での平和の取り組みを発展させる機会としています。

語り継ぐ被爆体験（家族・交流証言）

被爆体験の継承を望む被爆者から、それを受け継ぎたいかた（家族・交流証言者）への被爆体験の継承を支援しています。家族・交流証言者としての活動の場を広げることで、被爆の実相の次世代への継承を進めています。

平和情報サイト「長崎原爆の記憶」

被爆の実相を風化させることなく、効率的に次の世代へ継承するため、報道機関などさまざまな機関や団体が所有する長崎原爆に関する資料や情報などを公開しているホームページとリンクするポータルサイトで、主に小中学生の平和学習を支援しています。

平和の灯（ともしび）

平和祈念式典の前夜に、市民が平和の灯をともすことにより、市民一人ひとりが原爆の惨禍を決して忘れることなく、平和の尊さに対する意識の継承を図り、あわせて平和都市長崎を世界に向けてアピールします。

2. 物言わぬ語り部

長崎原爆遺跡

6月、国の文化審議会が「長崎原爆遺跡」を史跡に指定するよう文部科学大臣に答申しました。被爆された方々が少なくなる中で、物言わぬ語り部としての役割はますます重要になってきています。今後も遺跡の保存と活用を図り、被爆の実相を後世に伝えていきます。

爆心地

被爆後の爆心地（林重男撮影）

原子爆弾が炸裂した空中点の直下である爆心地。

爆心地公園には原爆による破壊を示す遺構として被爆当時の地層が残されています。

もともと南に傾斜した地形でしたが、原子爆弾の爆発によって生じた瓦礫の堆積および公園化に伴う整地層により現地形が形成されました。

旧城山国民学校校舎

被爆後の旧城山国民学校校舎（林重男撮影）

爆心地の西約500mに位置していた旧城山国民学校校舎は当時、鉄筋コンクリート造3階建てでした。

原爆により校舎内部は破壊され、北側校舎の2・3階は全焼。現存しているのは昭和12（1937）年に完成した北側校舎の階段棟の部分。内装に埋め込まれた木レンガが焼損したまま残っており、高熱による被害を示しています。

浦上天主堂旧鐘楼

被爆後の浦上天主堂旧鐘楼（米軍撮影）

浦上天主堂は、爆心地の北東約500mの位置にあり、石材とレンガで造られた天主堂は原爆によりわずかな堂壁を残して倒壊しました。

また、天主堂の双塔にあった鐘楼ドームは鉄筋コンクリート製で直径5・5m、推計約50トンで、南側のものは天主堂内に落下しました。現存しているのは、北側のもので、崖下の小川に滑落し、当時の位置をとどめています。

旧長崎医科大学門柱

爆心地の南東約700mに位置した旧長崎医科大学では、原子爆弾により教職員・学生あわせて890人余りの死者が出ました。

正門は石造の2基の門柱と、コンクリート製の2基の内柱で構成。南側の門柱は、爆風により柱部が基壇部から水平方向に9cmずれて傾き、基壇部との間に最も大きいところで16cmの隙間ができてしまいました。

被爆後の旧長崎医科大学門柱（米軍撮影映像を加工）

山王神社二の鳥居

被爆後の山王神社二の鳥居（林重男撮影）

山王神社は爆心地の南東約800mに位置します。社務所や神殿などの建物のほか三の鳥居と四の鳥居も倒壊しました。

二の鳥居は原子爆弾の強烈な爆風を受け、南側の笠木が東に回転し、北側の柱は倒壊して一本柱に。

残された南側の柱の爆心点に面した部分には、熱線の影響で表面に剥離や溶解が起きています。

3. 被爆の実相を伝える

▼被爆の記憶

被爆者のみなさんは肉体的・精神的な苦痛を抱えながらも、「世界中の誰にも二度と同じ思いをさせたくない」という強い思いで平和の訴えを続けてきました。

これが、核兵器のない平和な世界を実現しようとする長崎の原点です。

しかし、被爆から70年が過ぎた今、その被爆者の方々は少なくなってきています。わたしたちはこれまで以上に、原爆の惨禍を体験した被爆者の声に耳を傾けなければなりません。

▼核兵器保有国指導者の被爆地訪問

5月27日、現職の米国大統領として初めて、オバマ大統領が広島を訪問しました。昨年5月にニューヨークの国連本部で開催されたNPT再検討会議で示された最終文書案でも、「世界の政治指導者たちが核兵器の被害を受けた地域や人々と交流し経験を共有すること」の必要性が盛り込まれました。核兵器保有国の指導者が被爆地を訪問し、自らの目で、「人間の視点」から被爆の実相を見てもらえば、「核兵器はあってはならない」という結論になるのは明らかです。

長崎市は広島市とともに世界の指導者に対して被爆の実相を知ってもらうため、被爆地訪問を要請してきました。今回は残念ながら、オバマ大統領の長崎訪問は実現しませんでしたが、わたしたちは核兵器保有国の指導者などの被爆地訪問と、核兵器の非人道性を、粘り強く訴え続けていきます。長崎に来て、被爆者や若者たちの話に耳を傾けてもらい、平和への思いと未来への希望を共有することが長崎の願いなのです。

▼次の世代への継承

被爆や戦争の記憶の風化や、若い世代の無関心が懸念されます。

そんな中、若者が過去の歴史を知り、平和な未来を想像する力をつけながら、自ら考え、平和の思いを発信する活動が大切になっています。

被爆体験を持たない世代が、継承し、国内外へ向かって発信することで、「世代が代わっても被爆地は核兵器廃絶をあきらめない」という強い決意が伝わります。

オバマ大統領の広島訪問の場面に立ち会った若者に話を聞きました。

広島市提供

若者が世界を変えることができる

ナガサキ・ユース代表団 河野 早杜（はやと）さん
（長崎大学環境科学部 4 年生）

▶なぜ、平和についての活動を？

8 月 9 日、長崎出身の友人が平和について自分の考えを発信していることに驚き、平和を祈る長崎のまちの空気にも心を打たれました。長崎出身でない私には、地域によってこんなにも意識の違いがあることを痛感しました。
核兵器の現状や国による核兵器への考え方の違いに気づき、関心を持つことから平和への行動が始まると思います。私は、この気づきや関心・興味を大事にしています。
長崎で平和を学ぶ若者であることに誇りを持って、平和だけでなくいろいろなことを探求していく気持ちを持ち続けたいです。関心を持つことが何かを変え、創るきっかけとなります。

▶広島訪問に立ち会って

オバマ大統領の訪問が、自分の想像以上に報道で取り上げられている様子を見て、自分たち一市民が一人で発信することと比べて、はるかに及ばない影響力の大きさを感じました。
歴史的な場面に立ち会ったのだと感じて、被爆からこれまでの歴史について、あらためて見直してみたいと思うようになりました。

平和教育の先駆者となりたい

ナガサキ・ユース代表団 秀（ひで） 総一郎さん
（長崎大学多文化社会学部 3 年生）

▶なぜ、平和についての活動を？

戦争について、広島・長崎出身の同級生が自分のことばで議論していることに驚きました。
世界には多くの国があり、その違いや考え方を知り、より良い方向に進んでいくための方法を協力して考えていかなければなりません。
「平和教育」は、過去の戦争についての知識を増やすことが目的ではありません。平和な世界にするために「何をすべきか」考える力をつけさせることが「平和教育」だと思っています。
「核兵器をなくし、平和な世界にする方法を自ら考える」教育をこれから学び、いつか、日本の平和学習に提案できるようになることが私の夢です。

▶広島訪問に立ち会って

現職の大統領が被爆地を訪問することはとても意義のあることだと思います。
「子どもたちの笑顔、両親からの優しい抱擁（ほうよう）」という日常生活の幸せに触れたオバマ大統領のスピーチが印象的でした。大統領も一人の人間です。自分たちと同じように平和を願っているんだということを感じました。

長崎が受けた惨禍を、そして、平和への希望を、自分のことばで伝えたい

吉田 祐子さん

平和案内人

被爆の実相と平和の尊さを伝えるため、長崎原爆資料館や長崎原爆死没者追悼平和祈念館、被爆建造物などの案内をするボランティアガイド。
185人のガイドが登録（平成28年7月現在）しており、昨年度は3万人を超えるかたに被爆の実相を訴えました。

「平和について考えることが自然なことでした」と幼い頃を振り返る吉田さん。平和案内人として原爆資料館などを案内しています。被爆者の故・吉田勝二さんの体験をまとめた紙芝居を見て、「この出来事を忘れてはいけない」と活動をスタート。被爆体験記の朗読ボランティアにも参加しています。

「全国から来られる方々とのふれ合いが財産」と吉田さん。子どもから戦争を体験した年配のかたまで、丁寧に語りかけます。

「被爆体験がないので、その状況を話すことはできません。自分なりのことばで原爆について話すことで何かを感じてもらい、平和を考えるきっかけとなれば」と話します。

「平和の原点は人間（ひと）の痛みがわかる心を持つことです」故・吉田勝二さんがよく言っていたことばを思い返しながら、今日も優しく、平和を考えるきっかけ作りをお手伝いしています。

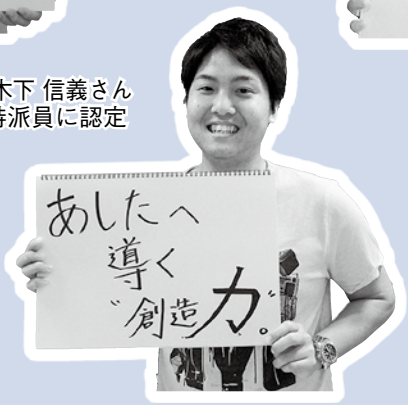
■常駐ガイド
・毎日10時～16時
・場所 原爆資料館エントランス
■予約ガイド（碑めぐり・資料館予約）
事前に申し込みが必要です。
【問い合わせ】
長崎平和推進協会（☎844-9922）

みんなの平和

～あなたにとって“平和”とは？～

長崎平和特派員
ニューヨークばってん会（※）木下 信義さん
※今年7月 新たに長崎平和特派員に認定

平和案内人
吉田 祐子さん



ナガサキ・ユース代表団
河野 早杜さん

ナガサキ・ユース代表団
秀 総一郎さん

あなたにとっての“平和”を自分のことばで書いてみよう